

分科会名 <div style="border: 1px solid black; text-align: center; margin: 5px 0; padding: 2px;"> 体育科 </div> 令和5年6月7日（水）	会場 川崎市立西楯ケ谷小学校 助言者 川崎市立小学校体躯研究会 副会長 渡部 伸一 <div style="text-align: right; margin-right: 50px;">監 事 西田 寛</div> 川崎市総合教育センター 門口 知弘指導主事 授業者 川崎市立西楯ケ谷小学校 多田篤史 山口理奈子 廣中健太郎 今さとみ 原剛 石川航大 高橋穂乃実 西宮 智人 司会者 川崎市立下作延小学校 酒井 尚之 記録者 川崎市立下作延小学校 山崎 希比古 世話人 川崎市立西楯ケ谷小学校 目澤 貴史 出席者数 109名
--	--

1 提案の概要

2年 ゲーム「ボール蹴りゲーム」

- ・ 規則や場の工夫をすることで、誰もが楽しむことができるようにする。
- ・ 言葉かけを工夫することで、自分のめあてをもってゲームを楽しむことができるようにする。

3年 ゲーム ネット型「ソフトバレーボール」

- ・ 規則の工夫や変更を取り入れてゲームをすることでソフトバレーボールの楽しさを味わうことができるようにする。
- ・ 規則・作戦タイム等の手立てや、めあてに応じた練習例を紹介・提示することで、意欲や必要感をもったり、気づいたりすることができるようにする。

5年 陸上運動「走り幅跳び」

- ・ 場の設定や教師の関わりを工夫することで試行錯誤しながら繰り返し取り組めるようにする。
- ・ 見合いの位置、見合い方やめあてボードの活用等を工夫することで友達と関わり合いながら高め合えることができるようにする

2 研究協議の概要

2年 ゲーム「ボール蹴りゲーム」

全体を通しての様子

- ・ ゲーム中・ゲーム前の声を掛け合う姿があり、どの子どももめあてをもち夢中になって取り組んでいた。

コートの形

- ・ 場がいくつかがあって良かった。
- ・ 1年の時に行ったボール投げの時と同じコートで子どもたちは楽しんでいる様子があったのでその時のコートを活かしていった。最初は、三角形や四角形を考えていたが子どもの良い動きにつながりやすいものという考えで3つに絞った。
- ・ 4か所からゴールをねらえる中で3対3で行っているところでは、守りが空いているところをねらってボールを蹴っていた。空いているところが1つあることによってどうやって攻めたらいいのかや、どうやって守ったらいいのかなど考えている姿が見られた。授業の中で子どもたちが考えるということを大切にしていることが伝わった。

考えさせる時間と運動量のバランスについて

- ・ 場の工夫を考えることで子どもたちの思考力が高まる。
- ・ 誰もがボール蹴りを楽しみたいという思いをつことを大切にしたり、困ったこと、必要感が出たところで上げられるように学習の流れを計画した。その時にどんな発問や工夫をしたらいいのか学年でも考えた。

守備について

・攻め方を見つけながら活動していた。人がいないところを見つけてたくさん点は入っていたが、守備についてはどのように声をかけていたのか。

⇒守備については、特に指導はしていない。それよりも、得点を入れる方に重きを置いて声かけをしていた。

蹴る指導について

・ボールを止めて蹴ることは難しいと思うが、蹴る指導について気をつけてほしいことは何か。

⇒蹴る指導については細かく指導していない。それよりも、どこに蹴るのかや、どうやって蹴るのかに重きをおいて指導していった。

3年 ゲーム ネット型「ソフトバレーボール」

全体を通しての様子

・子どもたちが汗だくになって活動していた。子どもたちがめあてをもって活動しているということがわかった。

・ボールをキャッチして、セッターの役割の児童に、しっかりとボールを渡せていた。動きがバレーボールになっていてすごかった。

・ゲームの形になっていた。

・キャッチを取り入れながら3段攻撃ができていてすごかった。

単元・領域・規則について

・3年でプレルボールを選択することも多いと思うが、ソフトバレーボールを選択した理由は何か。

⇒高学年でのソフトバレーボールの技能につながるように、中学年である程度の技能が身につけられるように、積み上げられるようにしたいと考えたのでソフトバレーボールを選択した。

・試合の中で、サーブだけで終わる場面も見られた。サーブを取り入れた意図は、何だったのか。

⇒サーブを取り入れた意図は、4つある。1本目から構える気持ちをつくりたい、ブロックが出てきたのでサーブをブロックするというフワッターがどっちも見るという構えをつくりたかった。誰でも得点できる機会を作りたかった。高学年からサーブが出てくるのでつながるようにしたいと考えたため。

子ども同士の関わり

・話し合いの場面では、「今度は早く速攻で行こう」など攻撃の型が分かっている攻撃の方法を変えているという思考がすごかった。

・作戦タイムでは、子ども同士で真剣に話あっている様子があった。また、子ども同士が価値づけしていたり、認め合っていたりする姿がよかった。どんな工夫をしていたか。

⇒助け合い安心できるクラスづくりを大切にしている。日頃の積み重ねが自然な形で表れていたのではないか。

・作戦タイムを途中で取り入れることによって子どもたちの意欲が最後まで持っていた。

言葉かけ

・試合中の言葉かけでは、キャッチの時間が短くなるなどプレーが間延びしない良さもあったが、急かされてミスをしている場面もあった。

・「キャ(ッチ)」「ふわっと」「アタック」などの合言葉がよかった。

5年 陸上運動「走り幅跳び」

全体を通して

・子どもたち同士で教え合っていたり、一本一本集中して取り組もうとしたりする姿勢がよかった。

言葉かけ・めあてのめあせ方

・声かけについて、先生がすべて答えを言うのではなくて、考えるきっかけを与えていて良かった。子ども同士で自然と関りが生まれる言葉かけであった。

・子どものやってみたところをまずは、ほめることを大切に。課題になるところは、落ち着いた雰囲気になるように工夫した。

・めあてについては、3つの局面に分けた。各局面でポイントを共有した後に、まだ自分にできていないところはどこなのか考え、めあてを選べるようにした。

課題解決の場での指導

- ・何度頑張っても踏み切りがうまくいかない子どもについて、どんな言葉かけや指導をしたのか。
 - ・踏み切りがうまくいかない子どもには紅白玉を置いて助走の目印にしたが、指導しきれなかった。目印を置いて微調整をしてトップスピードで踏み切れるように徹底できれば解決できたのかもしれない。
- ⇒子どもたちは助走のところでは課題をもっていなかった。助走をしないところからスタートして、助走すると何で良いのか伝えられるとより助走について課題意識をもてたのではないか。
- ⇒自信をもって踏み切れるように、3歩前くらいのところで目印をつけておくとよかったのではないか。
- ⇒記録を測るときになると、助走が合わなくなってしまっていたため踏み切りゾーンを広げたり、踏み切り板を置いたりすることによって子どもたちが課題解決で行ってきたことがそのまま活かされたのではないか。
- ・意識を認めたり、意識を修正したりする言葉や動きを認める言葉が子どもたちの次のめあてにつながっていて良かった。待っている場所を工夫してもよかった。
 - ・止まった状態からではなく、少しリズムがついた状態から跳んだ方がより空中姿勢におけるめあて解決の場になったのではないか。

ギガ端末の活用について

- ・ギガの撮影については、1時間目に撮影し、6時間目でも撮影してどれだけフォームが変わったのか見比べることを考えていた。2～4時間目でも撮影しながら見合いができればよかったが、撮っている時間よりもどんどん跳びたいという子どもたちの実態を受け変更した。

3 今後の課題

【川崎市立小学校体育研究会 副会長 渡部 伸一先生】

ボール蹴りゲーム

- ・運動すればよいというわけではないので、体育の授業の学び方を学ぶということをどの学年も指導する際に意識できるとよい。
- ・得点を取って喜んでいるチームがたくさんあった。個から集団へとつながっている姿が見られた。
- ・ゲームの時に、どこをねらったらよいのかなど子どもたちなりに一生懸命作戦を考えられていた。
- ・得点を取るためにどうしたらよいのか真剣に話す姿があり、子どもたちは地面に考えを書いていた。ホワイトボード等で記録に残すことができれば、それが評価の資料になる。
- ・攻撃のところに意識がいきがちだが、守備についても子どもたちはよく考えている姿が見られた。それを価値づけていくことが大切である。

【川崎市立小学校体育研究会 監事 西田 寛先生】

ソフトバレーボール

- ・ボールをよく追いかけていた。ボールを落とさないようにすることが浸透していた。中学年では、そこを味わせることが大切である。勝敗を受け入れる姿もよかった。
- ・作戦タイムで話し合いが停滞していた時に担任の先生言葉かけで、子どもが動いていた。関係性等が分かっている担任が知っている情報を専科と共有して授業に臨むことが大切である。
- ・中学年は、コート大きさ、人数、ゲームの条件などの規則の工夫と型に応じた簡単な作戦の工夫が大切である。
- ・途中で規則が変わったことでどうだったのか。規則になじむまで時間がかかる。同じようなプレーが出てくるような優しい規則の工夫が大切である。

川崎市総合教育センター 門口 知弘指導主事】

走り幅跳び

- ・子どもも先生も一生懸命な姿が見られた。
- ・掲示の資料や個々のめあてをホワイトボードに貼る工夫、めあてを達成するそれぞれの場など学習環境が整っていた。
- ・様々な手立てがあり、両足で着地するというのも、どの子どももできていた。
- ・一対一の伝え合い。子どもたちもよく考えているし、気付いていたがもっとみんなで広げたり、共有したりできるように、待っている人はどこにいたらよいか子どもたちに聞いてもよかったのではないか。
- ・先生が子どもに教えすぎないように気をつけ、子どもが主役になる授業を意識することが大切である。
- ・言葉かけをする際には、技能の改善点だけではなく、「見る」「支える」場面での子どもたちの発言を価値づけるとよい。
- ・めあてについて選ぶ際には、より具体的に考えられるようにすると良い。めあてが変わった時に、すぐに変えられるようにホワイトボードを置く場所も考えられるとよい。